

梅花短大 家本 修 鳴門教育大 ○広瀬月江

滋賀女短大 成田巳代子 大谷女短大 小林昭子 樟蔭東女短大 山本倫子

目的：衣服や色の嗜好の形成に関して、母子間にどのような関係が存在し、影響を与えるのであろうか。嗜好の形成過程において、その要因を明らかにすることを目的に一連の嗜好性に関する研究を行う。本報においては、母子間の嗜好色等について報告する。

方法：児童（5・6年生）とその母親を対象に色彩の嗜好性や生活行動等についての調査を実施した。調査は、親子に同一のナンバーの用紙を用いて分析時に組に出来るように設定した。何れも質問紙調査法で、児童は集合調査で母親は託送調査である。実施時期：昭和62年11月中旬～下旬。調査数：292組（セット回収率81.5%）。調査地域：大阪府堺市。集計分析は、クロス分析、数量化Ⅱ類、クラスター分析、分散分析である。

結果：①日本色研のカラーチャートから選択された好きな色：男児（白23.7%、黒22.4%、黄9.9%）、女児（白21.4%、黒、ピンク17.1%）であり、母親（黒22.2%、紺16.2%、白15.4%）である。②嫌いな色：男児（ピンク30.9%、茶14.5%、ベージュ13.8%）、女児（茶19.3%、ベージュ16.4%、エンジ11.4%）で、母親（紫28.2%、赤15.4%、ベージュ9.4%）である。③女児の好きな色と子供から見た母親の好きな色との関係は、（一致率：22.3%）あり均一な分布でない。また、親と子の好きな色の関係は、（一致率：23.1%）で、有意に同一傾向の嗜好が伺える。④女児で好きな色と着たい服の色の関係は、（一致率：50.7%）であるのに対して、母親は（一致率：16.2%）となる。衣服の色の嗜好に関しては、大人の場合、他の要因の存在が示唆される。⑤母親の似合う色と好きな色では、（一致率：29.9%）あり、女児（一致率：35.5%）で、④の外的要因の存在が伺える。